葬儀式場オープン

リビングとミュージアム 二つをコンセプトに…

㈱メモリアルアートの大野屋

㈱メモリアルアートの大野屋（大澤静司社長、東京都豊島区）はこのほど、同社が提案する家族葬スタイル「リビング葬」の専用式場とミュージアムをコンセプトとした「セレモニーホール」を組み合わせた葬儀式場「ホール&リビング リコルド田園調布」（東京都世田谷区東玉川）をオープンさせた。

「リコルド」の名称は追憶・回想を意味するイタリア語に由来するもので、故人の思い出を永遠のものとして美しく残していきたいとの願いが込められている。ゆったりとした時間・空間の中で故人を偲び、より印象深い別れのときをトータルにコーディネートする。

「リビング葬」では遺体を安置する二階のリビングルームに、キッチン&ダイニング、和室やバスルームを備えた自宅のような空間を演出＝写真。会葬者は遺族の自宅を訪問するような感覚で、時間を気にすることなく弔問できるようになっている。

また「セレモニーホール」（地下一階）はガラスと光を駆使した空間デザインが特長で、通夜や告別式といった宗教儀礼にも対応できるほか、故人の思い出の品や写真などを飾り、映像や音楽、照明、香りなどの演出を施すなど、新しい葬送スタイルでも利用が可能。

収容人数は五十人。

同式場（地上三階、地下一階）は敷地面積六十九坪。料金は全館二日間利用で二百八十万円（式場使用、演出一式、食事、返礼品、霊柩車使用料金等を含む）からとなっている。

問い合わせは同社＝フリーダイヤル（〇一二〇）〇二八八八八＝へ。

竹の骨に透明フィルム 現代的な新"和傘"

㈱日吉屋

和傘の製造販売などを手掛ける㈱日吉屋（西堀耕太郎社長、京都市上京区寺ノ内通堀川東入百々町）は、シナル（プロダクトデザイナー・島村卓実氏、京漆の佐藤喜代松商店、京銘竹の三木竹材店のプロジェクト）と協同制作した新和傘「SINARU・WAGASA」をこのほど発売した＝写真。

同商品は、昨年に東京で開催された見本市「100%Design Tokyo」で試作品を発表し大好評を得た。今年一月にフランス・パリで開催された見本市「メゾン・エ・オブジェ」では改良品を発表した。

SINARU・WAGASAは、伝統的な和傘を大胆に改良し、普段使いの傘として充分な機能とデザイン性を備えている。竹の骨に透明なフィルムを張った涼しげで現代的なデザインで、商品は骨の色によって四種類ある。機能的な主な特長は次の三点。▽樺と持ち手部分に竹集成材を使い、特殊フィルムを用いたことにより、耐久性が大幅に向上▽スライド式ロック機構を採用。親骨をロックし通常の洋傘のように頭を下にでき、普通の傘立てに立てられる▽竹のしなりを利用したロック機構により、片手の操作で半自動で開くことができる―など。サイズは全長七六㌢、閉じた時の直径が五㌢、開いた時の直径が一一三㌢。色はレッド、ブラック、ナチュラル、グリーン。価格は三万四百五十円（税込み）。

西堀社長は「当商品は竹が主材料なので、自然に返りやすく地球に優しい傘です。また、着物にもスーツにも合い、昔の番傘のように、いつでもどこでも使用できます」と話す。同商品は四日から八日までドイツ・フランクフルトで開催された見本市「テンデンス」でも発表された。

問い合わせは日吉屋＝電話〇七五（四四一）六六四四＝まで。ホームページアドレスはhttp://www.wagasa.com。

たたんだ時ロックできます

応援・宗教界・情報

会員制の「友の会」創設

殺伐とした世の中に 伝統文化を伝えたい

㈱宮絵師安川

社寺の彩色・絵付けを手がける㈱宮絵師安川（京都市左京区岩倉中町四三三ノ一）の代表・安川如風氏＝写真＝は、日本の伝統文化を伝える会員制の「京の宮絵師・安川如風友の会」をこのほど創設した。

昭和二十一年に京都の漆職人の家に生まれた安川氏は、武蔵野美術大学で日本画を専攻し、画家を目指すが、父の勧めで京都の川面美術研究所に入り、二条城障壁画の模写を手伝っているうちに、伝統文化の奥深さに目覚めていった。

昭和五十二年に独立し、安川如風宗教美術研究所を設立。昭和六十二年に宮絵師安川を設立。これまで全国の社寺五百カ寺余りの彩色の制作、修復の仕事に携わってきた。平成十六年、真宗高田派本山専修寺から絵所頭を拝命した。

友の会設立の理由は「昨今の宗教離れや殺伐とした事件は、日本人が社寺を精神的なよりどころとしなくなった現われ。伝統文化を取り巻く状況は厳しい」という危機感からだった。

友の会の活動内容は、会報誌を年六回発行するほか、安川氏にかかわる文化活動の連絡や、京都と文化をテーマとする懇親会の企画など。

安川氏に関する間近の文化活動としては、東京都大田区の真宗高田派専修寺関東別院で、八月二十三日から二十六日まで開催される展示会「浄土の世界と荘厳の伝統文化」がある。

六月初めに年会費一万二千円で会員を募集したところ、約六十人が入会した。「会員百人が目標なので、二回目の募集で達成したい」という安川氏の願いは、社寺に人々を呼び戻すことと、伝統工芸界の活性化だ。

家族のきずな川柳に

第一回大賞の表彰式

浜屋㈱

現代失われつつある家族のきずなを川柳に託して見直そうと創設された「家族のきずな川柳大賞」（主催・読売新聞、協賛・浜屋㈱）の表彰式が十二日、大阪府豊中市の「よみうり文化センター千里中央」で行なわれた。

第一回の同川柳大賞には全国から約七千五百句の応募があり、審査の結果、大賞一句、優秀賞五句、佳作十句、審査員特別賞一句が選ばれた。

川柳作家やすみりえさんが「川柳といえば社会風刺や皮肉といったイメージが強い中、今回寄せられた句の多くは非常に温かみがあった。大賞作品の大阪府高槻市の彦坂暁子さんの『帰り道 並ぶ父子の 影同じ』は、夕暮れ時、歩幅を合わせながら歩く後ろ姿がほほえましく、親子の会話が聞こえてきそう」と講評。やすみさんから彦坂さんに表彰状が手渡された＝写真。

優秀賞の五作品についても講評し、「思いやりの原点は家族が互いにいたわり合う心。親から子へ、子から孫へと受け継がれる」という同川柳大賞の趣旨を分かりやすく説明した。

優秀賞受賞者の大阪府の北田優子さん、茨城県の老松ゆうこさん、京都市の古川健一さん、京都府の増田年さん、大阪府の吉川晋吾さんの五人と、佳作の鳥取県の山下恵美子さんら十人には、主催者と協賛者から表彰状が贈られた。